

次期学習指導要領を読む ① 総括目標が示す学びの方向性

8月1日の中教審の教育課程企画特別部会で「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）」が提示されました。昨年8月26日に同部会から「論点整理」が示されてからほぼ1年が経過し、この間、教科等別のワーキング・グループ等で新課程に関する審議を取りまとめたものです。これを受けて各教科等では校種別に学習指導要領の策定に一齐にスタートすることになります。これまでも話題にしてきた通りに、今回の改訂は「能力ベース」での基準作りであることから、各教科の一般目標および学年目標等がどのように示されていくのかに注目していく必要があると思います。今月は審議のまとめ（素案）から「算数・数学科における教育のイメージ（案）」に示された教科の総括目標を分析し、これからの算数の学びづくりがどのような方向に進むのかを考えてみたいと思います。

審議でまとめられた総括目標は「数学的な見方・考え方を働かせ、算数の学習を生活や学習に活用するなどの数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する。」と三つの視点から構成されているのが特徴です。その意図を確認していこうと思います。

まず、数学的な見方・考え方を働かせることを重視していることです。「数学的な見方」とは、事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に着目してその特徴や本質を捉えること、「数学的な考え方」とは、目的に応じて数・式、図、表、グラフ等を活用して論理的に考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識・技能等を関連付けながら統合的・発展的に考えることです。つまり、「数学的な見方・考え方」とは、事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、算数・数学が大切にしている論理的、統合的・発展的に考えることを意味しますが、子どもがこのような力を働かせながら問題解決することを目指していることは、授業づくりのスタートを見直す必要を感じさせます。

次に、数学的な活動の充実を強調していることです。今回の基準改訂の審議の中で、日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察するという問題解決の過程と、数学の事象について統合的・発展的に捉えて新たな問題を設定し、数学的に処理し問題を解決し、その解決過程を振り返り概念を形成したり体系化したりするという問題解決の過程の二つのサイクルが相互にかかわり合って展開することが重要であることが示されました。このプロセスを丁寧に数学的活動として位置付け、形式化・形骸化した「型」に拘泥することなく、算数・数学を創り出す学びを実現していくことが期待されているのだと思います。

そして最後は、数学的に考える資質・能力の育成を目指すという能力ベースでの教科指導へのシフトチェンジです。算数・数学を学ぶ価値を資質・能力育成に据えることで教科指導の価値は質的に変化していくと同時に、指導の在り方も大きく変革が求められます。きっと、授業の終末で子どもが確認していく「まとめ」に、その変化ははっきりと表れてくるのだと思います。内容ベースに留まることなく、学んだ成長の様子が刻まれた「まとめ」となり、それが子どもの「数学的な見方・考え方」をより確かなものとして、次なる学びを支えていくことになっていくのだと言えるでしょう。

(2016/08/11)